



迷路抜け



川崎ゆきお

日常の中に地形的な迷路はないが、頭の中での迷路はある。迷路は迷い込んで、何処にいるのかが分からなくなり、道に迷うことになる。これが町中では抜けられないような道を指すのだろうか。そこに住んでいる人はそれを知っているのに、通り抜けようとはしない。

頭の中の迷路は思い迷うようなこと。話の道筋が見えないとか、よく分からないまま彷徨っているような。

「迷ったときはどうしますかな」

「何処で迷ったのかを思い出し、そこへ戻ります」

「戻れない場合は」

「それなんですよ問題は。戻れば、分岐点でやり直せますが、その分岐点が何処だったのかが分からなかったり、またはそこへは二度と立ちたくないとか、そういうことで」

「そうだと、どうなりますか」

「迷路というのはいろいろな場所と繋がっている可能性があります。見えないのでよく分からないのですが、本道に繋がる道を発見できるかもしれません」

「本道とは目的地へ通じる道のことですね」

「そうです。しかし目的地が曖昧だと、その限りではありません。僕の場合、目的地、行く場所は、まあ、適当でよくて、その道筋を楽しもうとする部類なのです」

「ほう、部類」

「はい、部族、種族のようなものです。そういう性癖なんでしょうねえ」

「じゃ、迷う方が楽しいと」

「そうなんです。あとは偶然本道と言いますか、分かりやすい通りに出ることがあります。しかしそれじゃ面白くないので、また細くて分かりにくく、どこへ繋がっているのか分からないような道に潜り込みます」

「悪趣味ですか」

「これは、よく分かっている道に出たときの感動を楽しめます。そこでほっとする。迷いからさめたような。これがすこぶる感動的でした」

「無理に迷路に入り込むのはどうしてですか」

「見聞を広げるといふか、ここはどうなっているのかを見たいのですよ」

「それは好奇心のなせる技ですか」

「ああ、ただの刺激を求めて、だけです。そんな上等なものじゃない」

「冒険家ですなあ」

「細く、狭く、曲がりくねった迷路の脇にお宝が隠されているかもしれません。ただの空き箱だったりしますが、また、妙な人物とも出会います。まるでドブ板の裏側にくっついている虫のよ

うな人にね」

「ほう」

「だから、分かり切った本通りなど、刺激がないので、滅多に通りません」

「考え方もそうですかな」

「はい、よく分かっている考えより、何かよく分からない考え方の方に興味が行きますねえ。分かっているものはもう考えなくてもいいでしょ。分からないから考える。そして迷路に入り込む」

「抜けられる保証はありますか」

「ないから刺激的なんですよ」

「迷路脱出法は」

「忘れてしまうことです。すると迷路も消えます」

「それは頭の中での迷路の話ですね」

「そうです。忘れて真っ白にすれば、迷路も消えます」

「なかなか忘れられないこともあるでしょ」

「だから、別の迷路に入り込んで、書き換えるのです」

「ほう」

「すみませんねえ、分かりにくい話で」

「いえいえ、あなたのその話こそが迷路です」

了